



## PTA 母親委員 おすすめの本紹介 Part2

ははおやいいん ちゅうしん みな ちゅうがくせい  
母親委員さんを中心としたPTAの皆さんによる「中学生におすすめの本」紹介、2回目です。前は図書館だより発行後、早速借りに来てくれる人もいました。「※」の本以外は、大津中図書館にもありますので、ぜひ読んでみてくださいね。



### 『博士の愛した数式』小川洋子 (新潮社) ※おふたりからの紹介です

ぶん きおく はかせ かせいふ わたし むすこ す ひび  
○80分しか記憶がもたない博士と、家政婦の”私”とその息子が過ごした日々の物語です。3人のやりとりの中で数学者の博士が身の回りの数字に様々な意味があることを教えてくれます。[28の約数:1,2,4,7,14を足すと28になる完全数]などなど。物語も面白く、読んだ後は数学が好きになっているかもしれません。映画にもなっています。

ちゅうがっこう はじ ふ すうがく いろいろ たんご で かだい いみ ほうそく  
○中学校で初めて触れた「数学」。色々な単語が出てきて、どういう意味か、どういう法則なのかを調べて数学に興味を持ちました。文系の人は数学が好きになるきっかけに、理系の人はより深く数学を学ぶきっかけになると思います。物語も、人と人の絆や、様々な愛を感じられる作品です。



### 『モモ』ミヒヤエル・エンデ (岩波書店)

この本を読んだのは専門学校での課題の時です。はじめて読んだ時は難しく、課題への答えが分からなかった気がします。現代社会は時間におわれ、セカセカと生活している人たちがたくさんいると思います。1秒もムダにできず、イライラしながら働いているのかもしれませんが。そうすると、楽しむということを忘れてしまうのかもしれませんが。時間を削ることなく有効に使えるようになると、精神面の安定が得られ人生を楽しく過ごせると時間に余裕が持てるような気がします。



### 『あたしたちの居場所』高橋桐矢 (ポプラ社)

ばしょ はたはしきりや  
場所はどこであっても、仲間の大切さ、人とのつながり方を教えてくれます。自分らしく…自分を好きになる事、感じとってくれたらいいなと思う本です。



『<sup>まち</sup>都会のトム&ソーヤ』は<sup>こうだんしゃ</sup>やみねかおる（講談社）

2人の<sup>しゅじんこう</sup>主人公がさまざまな<sup>ぼうけん</sup>冒険に出かける<sup>はなし</sup>話です。シリーズになっていて、<sup>げんざい</sup>現在17巻まであります、<sup>じっしやえいが</sup>実写映画にもなっています。子どもが<sup>おもしろ</sup>面白いとよく<sup>よ</sup>読んでいます。本<sup>ほん</sup>なので、<sup>みな</sup>皆さんもぜひ<sup>よ</sup>読んでみてください。



『<sup>こじょう</sup>かがみの孤城』<sup>つじむらみつき</sup>辻村深月（<sup>しや</sup>ポプラ社）

「<sup>ふつう</sup>普通かそうじゃないかなんて<sup>かんが</sup>考えることがそもそもおかしい(リオン)」どこにも行けず、<sup>い</sup>部屋に閉じこもっていた<sup>め</sup>ところの目の前で、ある日<sup>まへ</sup>鏡が<sup>ひかがみ</sup>光り始めた。<sup>かがや</sup>輝く<sup>かがみ</sup>鏡をくぐり<sup>ぬ</sup>抜けた<sup>さき</sup>先の<sup>しろ</sup>城には、<sup>に</sup>似た<sup>きようぐう</sup>境遇の7人が<sup>あつ</sup>集められていた。7人は、その<sup>しろ</sup>城で<sup>かく</sup>隠された<sup>かぎ</sup>鍵を<sup>さが</sup>探しはじめる。

2018年<sup>ねんほん</sup>本屋大賞受賞作。生きづらさを感じている<sup>ひと</sup>人に”悩んでいるのはあなただけではない”<sup>いばしょ</sup>”居場所はひとつではない”と<sup>おし</sup>教えてくれる<sup>さくひん</sup>作品です。ぜひ<sup>よ</sup>読んで<sup>ほ</sup>欲しい1冊<sup>さつ</sup>です。



『<sup>そうきゆう</sup>蒼穹の昴』<sup>すばる</sup>浅田次郎（<sup>こうだんしゃ</sup>講談社）※

<sup>わたし</sup>私がこの<sup>ほん</sup>本に出会ったのは<sup>おとな</sup>大人になってからですが、<sup>いちばん</sup>一番のおすすめは？と<sup>き</sup>聞かれれば<sup>まよ</sup>迷わずこの<sup>ほん</sup>本を選びます。<sup>ぶたい</sup>舞台は<sup>せいちようまつき</sup>清朝末期の<sup>ちゆうごく</sup>中国、<sup>せいだいごう</sup>西太后が<sup>じじつじようちゆうごく</sup>事実上<sup>しはい</sup>支配していた<sup>じだい</sup>時代の話です。とはいえ、<sup>しじつどおり</sup>史実通りの話ではなく、<sup>じつざい</sup>実在した<sup>じんぶつ</sup>人物と<sup>かくう</sup>架空の<sup>じんぶつ</sup>人物が<sup>とうじよう</sup>登場。<sup>かきよ</sup>科挙・<sup>かんがんせいど</sup>宦官制度など、<sup>いぶんか</sup>異文化への<sup>きやうみ</sup>興味をかき立てられながら、

<sup>てんかい</sup>ドラマチックな<sup>よ</sup>展開で<sup>やす</sup>読み易く、それぞれの<sup>みりよくてき</sup>キャラクターもとても魅力的です。<sup>ちゆうがくせい</sup>中学生にとっては<sup>しょうしょうしょうげきてき</sup>少々<sup>びようしゃ</sup>衝撃的な<sup>ね</sup>描写も<sup>ま</sup>ありますが、<sup>お</sup>寝る間を<sup>よ</sup>惜しんで<sup>わたし</sup>読んだ<sup>どくしょ</sup>私のように<sup>たの</sup>「読書の<sup>し</sup>楽しさを知る<sup>し</sup>きっかけ」<sup>おも</sup>になってくれたら、と思います。



『<sup>ひらたけんや</sup>つみきのいえ』<sup>はくせんしゃ</sup>平田研也（白泉社）

以前、<sup>いぜん</sup>小学校の<sup>しょうがっこう</sup>読み聞かせで<sup>よ</sup>読んだ<sup>ほん</sup>本です。<sup>きゆう</sup>急な<sup>てんかい</sup>展開や<sup>も</sup>盛り上がりは<sup>あ</sup>ありませんが、<sup>す</sup>好きな<sup>ほん</sup>本だと<sup>い</sup>言ってくれる<sup>ひと</sup>人が<sup>おお</sup>多かったです。



『<sup>こうせいしゅつばんしゃ</sup>ひまわりさん』<sup>くすのきしげのり</sup>くすのきしげのり（佼成出版社）※

<sup>こ</sup>子どもに<sup>よ</sup>読み聞かせをするようになり、<sup>えほん</sup>絵本の<sup>よ</sup>良さを<sup>し</sup>知りました。この<sup>ほん</sup>本は<sup>わたし</sup>私の<sup>す</sup>好きな<sup>えほん</sup>絵本の<sup>いっさつ</sup>一冊で、<sup>こころ</sup>心の中が<sup>なか</sup>温<sup>あた</sup>まる<sup>ほん</sup>本です。ひまわりの<sup>はな</sup>花を見る<sup>み</sup>たびにこの<sup>ほん</sup>本を<sup>おも</sup>思い出します。

<sup>ほん</sup>本の<sup>しょうかい</sup>紹介と共に、<sup>ほん</sup>本についての<sup>おも</sup>思い出や<sup>ちゆうがくせい</sup>中学生への<sup>おも</sup>想いをたくさん<sup>か</sup>書いていただき、<sup>お</sup>ありがとうございました。また<sup>つづ</sup>次回に<sup>つづ</sup>続きます…

